



2004年12月10日

日本応用心理学会ニュースレター

—コミュニケーションの広場—

No. 11

認知行動療法あれこれ

日本応用心理学会名誉会員 林 潔*

カウンセリング、心理療法もさまざまな理論的背景をもとに発展してきています。その中で今日関心がもたれているもの一つが認知行動療法です。これは認知、すなわちものの見方を媒介として行動変革をはかろうとする試みです。認知行動療法では、ストレッサー（いわゆるストレス）とストレス反応との間に、個人の認知の仕方を媒介変数として設定します。そしてこの認知様式が妥当でなかった場合（認知の歪み）、問題が生じると考えます。同じストレッサーにぶつかって、人は必ずしも同じ反応はしない、それはなぜだろう。ストレッサーへの働きかけも必要としても、それだけでは問題が残るでしょう。あたりまえのことが、あたりまえとして認知されないと、かえって課題解決が厄介になります。始めての所に行った時に、ごく単純なことが分からず、道に迷ってしまった経験はありませんか。

社会心理学の方で、言葉はすべて命令形だと言われた方がありました。それと同様に人が特に確信のレベルで思うことは、自分自身を方向づける（条件づける）役割を果たします。

「この学校の人はみんな冷たい」と生徒が思っています。それだったら、学校を止めるか、転校するしかないというのが当然の結論でしょう。しかしこほどの小さな学校か、分校でもない限り、学校の人にはみんなとつきあえるのかどうか。みんなとらえてしまった場合、出口がなくなり、結論が飛躍してしまいます。つらくなったら、自分が思っていることがどの程度現実的だろうか、そう思う根拠は具体的に何だろう、そこまで本当に考えないといけないのかどうか、考える習慣をつけるのも悪くはなさそうです。

早稲田大学の越川房子先生が、自観法というのをなさっています。問題にぶつかったら、自分を第三者の目で見てみようという試みです。しかし第三者の目で見た場合感情が入ってしまい、自分がかわいそうになったりして、かえってつらくなることがあります。自観法はこの場合一切の感情を入れません。そうするとかえって楽になります。

池見酉次郎氏が指摘されるように、人間の問題はすべて同じレベルのものではありません。認知行動療法の試みは日常的な問題への対応にも役立つところがあると思います。また医療の問題について、心理学と医学とが協力していくこうという領域が行動医学です。2年ごとに開催される国際行動医学会にも、認知行動療法を方法とした報告が多く発表されています。

カウンセリング、心理療法も隣接領域の知恵を攝取して、それにヒントを得て発展してきたところもあります。またこれからもそうでしょう。心理学の各分野の方々が一同に会する機会は、非常に意味があります。応用心理学会もその場の一つとして機能してきました。

今後も多様な領域の方々の結集する場として、その役割を果たし続けることが期待されます。

参考文献

池見酉次郎 1982 心身医学、行動医学、生命倫理 心身医学, 22, 382-388.

岩本隆茂・大野 裕・坂野雄二 1997 認知行動療法の理論と実際 培風館。

(白梅学園短期大学教授)



* 2004年度日本応用心理学会第71回大会総会において名誉会員に推薦されました。

第71回大会を終えて

大会会長 嘉部 和夫

季節外れの台風かと思えば、新潟県中越の地震。自然の災害に見舞われ、大変な年になりそうな予感のする今日この頃ですが、会員の皆様にはお元気でお過ごしのこととお喜び申し上げます。

去る9月4日、5日に開催された日本応用心理学会第71回大会のご報告を致します。

第70回大会の盛大さに比べてこじんまりと質素になると、はじめから予想はしていました。しかし、現実になると、やはり寂しいものがあります。当初の計画では新しい試みをいくつか考え、それが成功すれば良いと考えておりました。ひとつは自主シンポジウム、もうひとつは発表形式です。さらに、「応用心理学の今」とでも題されるテーマに沿った公開講演でした。いずれも若手の研究者を意識しての企画でした。

残念ながら、自主シンポジウムは1件の応募もなく計画倒れでした。

また、発表形式では、いつもどおりのポスター発表、口頭発表の名称を変更し、時間を長くしたトークイン、この二つに関しては従来どおりでした。新機軸のラウンドテーブルについては、辛うじて1題の発表があり、どうにか面目を保ちました。発表をして下さいました南隆男先生には心から感謝致しま

す。

公開講演は、テーマ『現実生活と心理学』に沿った4人の先生にご登壇願いました。「マーケティングの実際」と題し、ソニーやポッカのマーケティングを30年近く手がけていらっしゃる、ジー・プラン株式会社代表取締役の小野寺富男氏に、「交通の心理学」と題して、自動車好きで知られる知覚心理学の研究者、日本大学文理学部教授の野口薰先生に、「痴呆高齢者の介護」と題して、厚生労働省の委員を歴任し、大学でも心理学の教鞭を取っておられる、日本大学文理学部助教授の内藤佳津雄先生に、「CFから見た消費者心理」と題して、博報堂で広告の実践をされ、私ども日本大学商学部で広告論の講座を担当されている、教授の樋口紀男先生に、それぞれご快諾を得、どの講演も30~50名の参加者で楽しくお話を聞くことができました。

こうしてみると、成功したのは公開講演だけかなと思います。「普段聞けない領域の最先端が聞けたような気がする」「心理学がいろんなところで役立っているんだとわかった」との感想を頂きました。

大会記念公開講演には、“賢治の学校”主宰の鳥山敏子先生にご登壇願いました。講演は、先生ご自身が“教育”へ何度も何度もアプローチしている事実を“育ちなおし”としてお話し下さいました。

“教師”になりたくて教員養成大学へ入学、卒業後東京の小学校で30年教え、現行の学校教育に疑問を持ち、自分壊しのために竹内演劇研究所に入り、その後、退職。宮沢賢治の『農民芸術概論要綱』の精神をよりどころに“賢治の学校”をたちあげる。そして、再度教師として教壇に立つが、飽くなき教育の追求から今度はシュタイナー教育を勉強しにドイツへ留学、そして丁度帰国されたところでこの講演になりました。自分に納得できるまでとことん追求する先生の“育ちなおし”的姿勢、自分の本性に気づき、“形”ではなく、“本質”を知ろうとすることに生命をかけている姿勢。頭の下がる想いでいた。

研修会では、「キャリア発達とメンタリング」と題して、亜細亜大学教授の小野公一先生、「五感の体操～新しい安全運動技法～」と題して、常磐大学教授の正田亘先生にご登壇願った。どちらも30~70名の参加者であったが、時代の要請というのか、学会参加者に看護師が多く、小野先生のテーマに参加者が多かった。

ポスター発表66件、トークイン25件、ラウンドテーブル1題3件、総計94件の発表になりました。

懇親会は大会会場軽食堂で開催され、参加者、ス



スタッフ合わせて約90名が参加し、学内でするイベントとしては質の高い料理を用意し好評でした。開催に当たり、今年で創立100年を迎える商学部長からご挨拶を頂き、先輩で今年ご定年になる経済学部教授で、今回大会の顧問をお引き受け頂いた馬場昌雄先生に乾杯のご発声をお願いしました。

懇親会の中では、次回大会当番校の福島学院大学のスタッフの先生がたのご紹介、名誉会員になられる林潔先生からご挨拶を頂いた。懇親会終了の少し前当たりより雨が降り始め、傘までは用意しなかったとスタッフ一同、対処に困りました。誠に申し訳ありませんでした。

以上が、第71回大会のあらましです。学会参加者は予約参加者199名、当日参加者42名、計241名の参加者でした。第70回大会に比べると参加者で半分、発表数でも68パーセントとかなり規模が縮小したものになりました。当初の予定の300名には程遠い結果となり、何とも申し訳ない気持ちで

いっぱいです。

IT時代なのでしょうか。webによる申し込みを導入しましたが、その結果は必ずしも良かったとは言えないと思います。事務処理はかなり楽になりましたが、その後の印刷への手順がもっと工夫されないと良いものにはなりませんし、費用がかさみます。また、従来の郵送とwebの二本立てで受け入れたことが、最後にwebに統一する手間が大変だったかもしれません。さらに、学生のアルバイト人件費が高額になることを忘れていました。前大会のようにボランティアを募ってやればよかったかなあと想っております。しかし、ボランティアでは今回のようない接遇はできなかったと思います。ゼミの学生に紙面を借りて感謝する次第です。

最後になりますが、学内外で今大会にご協力いただいた方々に、心より感謝申し上げ、稿を閉じたいと思います。有り難うございました。

(日本大学商学部教授)

日本応用心理学会 第72回大会のお知らせ 日本応用心理学会第72回大会準備委員長 星野 仁彦

2005年度第72回大会を福島学院大学で担当させていただきます。本学では勿論初めての大会開催でもあり、歴史ある本学会の大会開催に向けてこれから準備を進めてまいります。昨年度の開催が由緒ある日本大学で行われ、50年目の節目の年であったことを知らされました。本学は大都会の大学に比すれば小規模ですが、福祉学部福祉心理学科の発足3年目の開催で、教職員、学生とも一体となって会員諸先生のご発表のために準備致します。若手研究者が張り切って研究発表できるような環境作りを心がけ、本学会の新たな出発点にすべく努力したいと考えています。

大会日程等は次のとおりです。

日 程：2005年9月3日（土）～4日（日）
会 場：福島学院大学（福島市宮代乳児池1-1）
交 通：福島駅より阿武隈急行で二つ目「福島学院前駅」下車

認定「応用心理士」 認定審査員会からのお知らせ 委員長 馬場 房子

日本応用心理学会認定「応用心理士」認定審査委員会は、平成16年度前期分の資格認定審査を行った結果、以下の11名の方々を認定しました。

今後の予定：

1号通信送付：2005年3月下旬

大会参加申込・研究発表申込締切 郵送：2005年5月20日（金）、Web: 2005年5月31日（火）

2号通信送付：2005年6月10日

発表論文集原稿締切 郵送：2005年7月15日（金）、Web: 2005年7月20日（水）

大会のテーマは、「地域福祉に貢献する応用心理学」とし、本学で掲げる地域福祉に貢献する福祉心理学の確立に向けて、大会参加者が描く応用心理学と連携させ実り豊かな大会になることを目指します。ポスター発表、口頭発表のほか公開講演、シンポジウム、研修会（研修委員企画）等を予定しています。若手研究者の参加を増やすため各大学の院生を中心周知いただきたくお願いします。

注：理事会構成メンバーは、9月2日（金）夕方開催の理事会出席をご予定ください。

今現在で決定している日程等をお知らせ致しましたが、詳細につきましては後日「大会案内」をお送り致しますので、ご確認ください。

(福島学院大学教授)

226	嘉部 和夫	232	菊池加奈子
227	鈴木 由香	233	立田幸代子
228	関口 和代	234	河野 望
229	水野 寿子	235	花沢 成一
230	石橋 里美	236	所 正文
231	山岡 淳		

(亜細亜大学経営学部教授)

学会賞・奨励賞選考委員会報告

委員長 垣本由紀子

学会賞・奨励賞選考委員会は、推薦のあった学会賞候補者2名について、当委員会による第1次審査、および理事会による第2次審査の議を経て、学会賞を、国士館大学教授所正文氏に決定した。なお、奨励賞に関しては、推薦がなかったため、本年度は該当者なしとした。

学会賞対象研究および受賞理由は以下のとおりである。

学会賞対象研究

- (1) 所 正文著 「働く者の生涯発達—働くことと生きること」
白桃書房、2002年
- (2) Masabumi Tokoro "An Overconfidence Approach on Driving Attitude of Older Drivers"
交通心理学研究、2002, 17(1), 58-62
- (3) その他の論文

受賞理由

所氏は、第1回日本応用心理学会奨励賞を受賞後今日まで、高齢者を対象として大きく二つの研究テーマに取り組んでこられた。「働き手としての中高年の生き方」と「運転者としての中高年の安全運転のありかた」である。受賞対象となった業績は、これらのテーマを具体化したものである。著書「働く者の生涯発達—働くこと生きること」は、超高齢時代を迎えるにあたって、いかにして人生の質を高めていくかを大きなテーマとし、従来の研究のようにネガティブな面からのみ高齢者を捉えるのではなく、Positive Psychologyの理念を出発点として「愛」「労働」「遊び」といった人間本来の生き方からアプローチしたところに特色がある。研究の方法は、豊富な調査と徹底した事例研究にある。最終章

では、「働く者の生涯発達のための処方箋」を三つの仮説に対応して提案している。すなわち、その1は、ゼネラリストからスペシャリストへのすすめ、その2は、「二足のわらじ型」人生の生き方。これは高度に熟練した趣味を持つことと地域社会への貢献を意味する。その3は、対話から派生する「他人への思いやり」。これは、考え方の視点の転換や緩やかな精神テンポを持つことのすすめである。これらの提案は、安全運転の考え方にも通じるものである。論文「An Overconfidence Approach on Driving Attitude of Older Drivers」では、高齢者の不安全行動を助長する問題として加齢に伴い強化される「自信過剰」が明らかとなった。安全運転確保のためにには生涯発達のための処方箋として提案された特にその3の「他人への思いやり」の有効性が示唆され、さらに、個人特性として対処することの必要性が提案された。所氏が取り組む二つのテーマが互いに関連するところに生涯発達のための研究の意義が存在すると考えられる。その他の論文は多数あるが、そのほとんどが高齢者を研究対象とし、高齢者をポジティブに捉えながら交通社会の中で高齢者との共存をいかに図るかというテーマで調査・実験を実施しており、高齢社会の問題解決に大きく貢献してきている。

「自らに幸福感をもたらす生き方」は、応用心理学にとっても重要なテーマであり、これらの研究を遂行してこられた所氏は学会賞受賞者として適切であると判断された。

昨年の反動か、本年は推薦者数が極めて少なかった。しかし、適切かつ優秀な研究業績を対象に所氏に決まり安堵している。奨励賞が1件も推薦がなかったのは残念であるが、「機関誌に発表された論文」の中からと明確に規定されているため、論文の投稿数が増えることを念じてやまない。

(実践女子大学教授)

倫理委員会からの報告

委員長 藤田 主一

日本応用心理学会倫理綱領が、昨年の第70回大会（流通科学大学、森下高治大会会長）時の理事会ならびに会員総会において承認されました。会員諸先生には、本学会倫理綱領を遵守してご活躍くださいますようお願い致します。

なお、本年度より新たに日本応用心理学会倫理委員会が発足致しました。今後、倫理綱領に基づいた

諸活動を実践していく予定です。会員諸先生からのご意見をお待ちしておりますので、ぜひ委員会までお寄せください。委員会メンバーは、以下のとおりです。

- | | | |
|-----|-------|---------------|
| 委員長 | 藤田 主一 | (城西大学女子短期大学部) |
| 委 員 | 大坊 郁夫 | (大阪大学) |
| | 松下由美子 | (山梨県立看護大学) |
| | 内藤 哲雄 | (信州大学) |
| | 田中 真介 | (京都大学) |
| | 山本 寛 | (青山学院大学) |

国際交流委員会報告

委員長 長塚 康弘

1. 第26回国際応用心理学会関係—ご案内—

前回（第25回）大会に招聘を受け、本学会が invited symposium を提案した国際応用心理学会 (International Congress of Applied Psychology) の次期（第26回）大会は下記の通り開催されます。

会期：2006年7月16日から21日まで

開催国：ギリシャ・アテネ

国際交流委員会は同学会の開催要項と研究発表等の募集案内 (announcement & call for papers) パンフレットを入手しました。同パンフレットの入手を希望される方は、返信用封筒 (A4型、住所、氏名を明記、140円切手を貼付) を同封して、学会事務局にご請求下さい。

研究発表等の申し込み期限の詳細は上記案内に記載されていますが、主な発表の期限は次の通りです。

シンポジウム 2005年12月1日

口頭発表（15分） 2005年11月15日

ポスター発表 同

同学会の詳細については、下記の web site を参照してください。

www.iaapsy.org または www.erasmus.gr

2. アテネ大会への本学会企画シンポジウムの提案について（お知らせとお願い）

この件につきましては、「本学会としての参加の準備に着手し、日本応用心理学会としてシンポジウムを提案する。テーマについては国際交流委員会で検討を進め、2004年夏頃までにできるだけ具体案を用意し、理事会で成案を得る」ことを国際交流委員会が提案し、理事会の承認を得てすでに昨年度発行の「ニュースレター」および昨年度大会（神戸流通科学大学での70回大会）総会に委員会として報告いたしました。

このたび、10月30日の国際交流委員会および前

回のシンガポール大会シンポジスト合同会議においてこの件について次のとおりとりまとめ、準備を進めることになりました。ここに会員の皆様にお知らせし、ご感想やご提案をお寄せいただくなどご協力下さいますようお願い申し上げます。

- (1) 前回大会では Nair 会長の招聘により invited symposium として提案し、参加したが、次回以降も日本応用心理学会は継続して提案したいと考えていることを伝えて、今回も invited symposium として参加可能となるよう国際応心関係者に要請する。
- (2) 応用心理学会としての提案であることをふまえ、実践・問題解決を志向した応用心理学研究であることを基本とし、日本の特徴のある研究であることを加えて presentation をを行い、討議する。
- (3) 頻発する災害・事故、いじめ、犯罪等において被害を受けた人々へのケアや支援が消極的なのではないか。被害者に対する関わり方、支援が発達しない理由や原因等を日本人の人間関係、ネットワーク、社会システムなどの文化的要因の中に求め検討し、積極的（解決）事例を紹介するなどするとともにそれらの解決策を示す。
- (4) 今後のこの計画の取りまとめ役 (convenors) には内藤哲雄委員および蓮花一己委員をお願いすることとなった。participants と discussants については未決定とし、会員からの推薦、情報提供等の協力を得て本委員会を中心に取りまとめを推進することとした。

国際交流委員会 委員長 長塚康弘* 委員 林潔、垣本由紀子、松浦常夫、内藤哲雄** (*シンガポールシンポジウムコンヴィーナー、**同ディスカッサント)

10月30日の合同協議会は上記委員（松浦委員欠席）にシンポジストの蓮花一己、向井希宏、福原真知子氏が参加して行われました。

（新潟中央短期大学学長）

2005年度の研修会は、2005年9月の福島学院大学で開催される学会大会期間に行われます。臨床心理、健康心理学の領域を予定しております。プログラムは目下研修委員会で検討中です。また改めてご案内申し上げます。

（白梅学園短期大学教授）

研修委員会報告

委員長 林 潔

2004年度の研修委員会主催研修会は日本大学商学部の大会で、正田亘先生（常磐大学教授）、小野公一先生（亜細亜大学教授）にご担当いただきました。

学会賞を受賞して 所 正文

この度は2004年度の日本応用心理学会・学会賞を受賞し、大変うれしく思っております。私の研究を評価して下さった先生方をはじめ、応心会員の皆さんに厚く御礼申し上げます。私は7年前に本学会の第1回奨励賞を受賞いたしておりますので、今回の受賞によりダブル受賞となりました。大変名誉なことと心から感謝いたしております。

振り返れば1983年の金沢大会での初発表、それをまとめた84年の応用心理学研究・掲載論文が私の研究者としての原点になります。これらが今回の受賞対象研究(『働く者の生涯発達: 働くことと生きること』(白桃書房)、2002年発行)へと脈々と繋がっており、研究者としての私が応心によって育てられたことを今改めて認識いたしております。

現在私は次の二つの研究テーマをもっております。

1. 職業人のキャリアスタイル、ライフスタイル研究
2. 交通社会における高齢ドライバー研究

日本応用心理学会 第71回大会に参加して 雨森 雅哉

私は、9月4日・5日に日本大学商学部で開催された日本応用心理学会71回大会に参加しました。今大会は若手の研究者が参加しやすいように、大会参加費が安くなっていたり、トークイン、ラウンドテーブル等と口頭発表の名称を変更するなど、大会準備委員会の先生方のご配慮を感じることができました。

私は「パーソナルスペースと性格特性との関連性—接近者の印象評定も含めて—」という題でポスター発表をさせて頂きました。学会発表をするにあたり、発表直前まで先輩や先生方にいろいろとアドバイスを頂いたり、ポスターの手直しなど困難も多々ありましたが、こういう機会ならではの深い討論をすることもできました。発表を聞きに来て頂いた、理事の谷口先生や機関紙編集委員長の荻野先生からも貴重なご意見ご感想など頂戴することができ

1は応用心理学における組織・人事心理学、2の方は交通心理学と一見異質な2テーマですが、私自身の中では「高齢者研究」という共通性をもたせ二つを結びつけております。応用心理学は現象の記述や分析のレベルにとどまるのではなく、問題解決に結びつくものでなければならないことも応心での学会活動を通して学んだことであり、二つのテーマに活かしております。

今後の研究活動の方向ですが、私は国際学会での活動の重要性を痛感いたしております。依然として日本の心理学研究者は、多数の英文論文を引用して日本語で論文発表を行うことが多いように見受けられます。このスタイルではその論文を読む人は、日本人でしかもその特定の分野を研究している人に限られます。今後は日本社会をフィールドとした研究を英文で発表することが重要であり、国際学会も我々にそれを求めているように思います。私自身遅ればせながら数年前から始めております。語学の壁は厚く高いですが、今後とも地道な努力を続けていきたいと考えております。

(国土館大学教授)

ました。普段は教えて頂くことができない先生方からもご指導して頂くことができ、大変良い経験をつむることができました。また、同じくパーソナルスペースを研究している方とも意見交換ができ、そのような交流が持てたことも、大会に参加することで得られたことです。そして、ドイツから帰国されたばかりの鳥山敏子先生による「育ちなおし」についてという大会記念講演がありました。先生の体験によるお話は、大変興味深く聞くことができました。また、公開講演の一つの野口薰先生による「交通の心理学—危険運転の心理—」を聞くことができました。運転行動は知覚や性格など複数の領域に関することであり、各領域の研究者が協力し合って運転行動のすべてがわかるようになるのだと感じました。応用心理学会の利点は心理学の多くの研究分野と触れることができることだと思います。それは個人の研究にとっても、心理学の発展としても、とても有意義なものだと思います。

(文京学院大学大学院人間学研究科
心理学専攻修士課程2年)

日本応用心理学会 第71回大会に参加して

河野 望

9月4日・5日に日本大学で日本応用心理学会第71回大会が開催されました。今年の大会プログラムは、「現実生活と心理学」というテーマにふさわしく、現実生活に密着した内容を心理学の視点から実践的に研究されている報告が多くありました。「現実生活」と言いましても、実に幅広いものです。その多種多様な内容をそれぞれの切り口から報告され、議論できることが日本応用心理学会の利点ではないかと思います。

今回私は、研究発表の社会・文化のところで、「子育て期女性の社会参加に関する一考察—地域三世代子育て支援活動を通じての育ち合いから—」というテーマでポスター発表をさせていただきました。

研究室紹介(7)

信州大学人文学部心理学・社会心理学研究室

内藤 哲雄

信州大学人文学部（松本市旭キャンパス）は、1919年（大正8年）創立の旧制松本高等学校を受け継いでいます。1949年（昭和24年）に新制の信州大学文理学部として発足し、1966年に理学部が分離して人文学部となり、さらに1978年には経済学部が分離独立し人文学科だけの学部へと変わりました。心理学専攻として（小講座：教授1、助教授1）学生を養成するようになったのは、文理学部として発足してからです。その後1988年に社会心理学担当の教官1名が採用され、1991年に正式に小講座として設置され、翌1992年には心理学・社会心理学・社会学からなる行動科学大講座に改組されました。さらに1993年には、文化情報論講座（4名）が設置され、そのうちの1ポストに心理学の教官が採用となりました。1995年には人間情報学科と文化コミュニケーション学科の2学科に改組され、社会心理学分野が2名体制となりました。さらに2004年には、社会心理学分野に臨床心理学を含めることになり、教員1名が採用されました。大学院に関しては、1972年に人文学専攻科が設置され、1982年には専攻科が廃止され、大学院人文科学研究科（修士課程）が設置されました。今後も、学部改組や大学院博士課程設置の構想があり、心理学関連分野の発展が期待されています。

現在の専任教員は、行動科学講座では、心理学分野に嶋崎裕志教授（基礎心理学・視覚心理学）、今井

様々な分野の方々と自由に討論することができ、私にとってとても新鮮なアドバイスをいただくことができました。

また、私は日本応用心理学会の大会に参加、発表して4年目になり、この学会でしか会えない先生方や院生に再会することができました。日本応用心理学会には、院生である私たちが研究を報告しやすく、暖かく見守ってくださる雰囲気があり、多くの院生が発表を行っています。お互いの研究発表を聞きながら、刺激を受け、また次年度の大会発表に向けて自分の研究を進めることができる気がします。

大会事務局の方々の素晴らしい配慮によって、今年度の大会も有意義な大会となって終了致しましたことに、感謝致します。

（立命館大学大学院社会学研究科
人間福祉領域博士後期課程2回生）

章助教授（実験心理学・生理心理学）、社会心理学分野に内藤哲雄教授（実験社会心理学）、潮村公弘助教授（認知社会心理学・社会意識論）[2005年4月に転出]、杉浦義典助教授（認知心理学・異常心理学）の5名、文化情報論講座に、菊池聰助教授（認知心理学・神経心理学）1名で、合計6名です。また、松本市旭キャンパスには、医学部保健学科に玉井真理子助教授（臨床心理学）、教育システム研究開発センターには学内非常勤として人文学部の授業にも加わっている西垣順子助教授（発達心理学）がいます。また、長野市にある教育学部には、附属教育実践総合センターを含めて、心理学関係教員が12名います。詳細は、<http://www.shinshu-u.ac.jp>をご覧下さい。

人文学部での各学年の受入学生数は、心理学が10名前後、社会心理学が15名前後、文情報論講座の心理学が5名前後で、2年進級時に決定されます。このほかに3年次編入試験により若干名を受入れています。教育内容については、国立大学法人ならではの少人数教育で、いずれも実験・調査を中心としています。文理学部時代からの学部卒業生は多く、一般企業、心理職を含む公務員、大学教員など多方面に進出しています。近年は大学院進学者が少なくなく、本学の人文科学研究科や教育学研究科、他大学大学院へ進学しています。

（信州大学人文学部教授）

2004年度 公開シンポジウムのご案内

テーマ：「高齢時代の健康とスポーツ」
 日 時：2004年12月25日（土）14時～16時30分
 場 所：国士館大学（世田谷キャンパス）・中央図

第71回大会公式記録 (プログラム・発表論文集の訂正)

日本応用心理学会第71回大会準備委員会
 第1日（9月4日）公開講演I 122教室
 プログラム15ページ・発表論文集3ページ掲載の
 講演者 小野寺富雄氏のご所属
 誤 株式会社Gプラン
 正 ジー・プラン株式会社

書館地下・多目的ホール
 企画・司会：所 正文（国士館大学教授）
 シンポジスト：折原茂樹（国士館大学教授）、宮内康二（ニッセイ基礎研究所研究員）、時本誠資（国士館大学教授）、永見宏行（世田谷保健所所長）
 指定討論者：谷口幸一（東海大学教授）

第2日（9月5日）ポスター発表 212教室（臨床・相談）
 プログラム24ページ・発表論文集53ページ掲載の
 212-5 概日リズム睡眠障害と精神疾患との関係の発表者に関して訂正
 誤 連名発表者 梶村・堀・中林・渡邊・中嶋・高橋 の各氏
 正 発表者 吉田統子氏（単独発表に変更）

それぞれ、ご訂正をお願い致します。

事務局だより

名簿の記載事項について
 過日皆様のもとに会員名簿（2004年度版）をお届けさせていただきました。まだ届いていないようでしたら事務局までご連絡をお願いいたします。ご存知のように、会員名簿には多くの個人情報が含まれています。

お取り扱いにはご配慮をお願いいたします。

また、会員名簿をご覧になって、誤字脱字などございましたら事務局までお知らせください。さらに、記載事項から現在の住所や所属などが変更になっている方もご連絡をお願いいたします。

編集後記

ニュースレターは会員の皆様相互の情報交換の場です。ニュースレターに掲載を希望する情報などが

ございましたら、事務局の広報委員会までお寄せください。(F)

発行 日本応用心理学会広報委員会
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3-8-8
(株)国際文献印刷社内
電話 03-5389-6491 FAX 03-3368-2822

目 次

認知行動療法あれこれ	林潔	1	学会賞を受賞して	所正文	6
第71回大会を終えて	嘉部和夫	2	日本応用心理学会第71回大会に参加して	雨森雅哉	6
日本応用心理学会第72回大会のお知らせ	星野仁彦	3	日本応用心理学会第71回大会に参加して	河野望	7
認定「応用心理士」認定委員会からのお知らせ	馬場房子	3	研究室紹介(7)	内藤哲雄	7
学会賞・奨励賞選考委員会報告	垣本由紀子	4	2004年度公開シンポジウムのご案内		8
倫理委員会からの報告	藤田主一	4	第71回大会公式記録		8
国際交流委員会報告	長塚康弘	5	事務局だより		8
研修委員会報告	林潔	5			